記念吟行（極楽寺・成就院・長谷寺・懐古亭）　　俊　鳥　選・評

（吟行の難しさ）

只景色を写すのならば、その景色が佳いほど立派な句ができなければならぬ訳であるが、事実はそれと反対で、立派な景色は句にならずごみ溜や草むらの中から佳い句ができるというのは、只写すのではなくって、頭の中で別の天地を創造して行くのであるということがわかるであろう。

（「写生俳話一則」高浜虚子）

厳しい指摘である。吟行で勉強になることは、同じ風景を見て、AさんとBさんとで、何故異なる句ができるのかということである。

一方、同行の仲間同士では、選の評価が甘くなっていることもある。つまり「同じ土俵」なので**言葉が足りずとも想像が可能**なのであるす。大事なことは「吟行に参加してない人が理解できる句であるかどうか」。吟行の欠点は、作る方も、①鑑賞する方も**同じ景色にもたれる**ということに尽きます。

椨の木に誰がやどるか秋の雨　　晶　子

その意味で晶子さんの作品は独創的でした。タブの木のホラに、昔話の例えば「瘤取り爺さん」が隠れて一夜を明かしたことを、第三者でも容易に想像がつくからです。「秋の雨」も自然なモンタージュでありましょう。

長谷寺の一石一字蝉の声　　藤　則

一石一字としか表現してありません。が、読み手は何百とある墓石、刻字の中からあれこれと想像する、それで足りるのです。

長谷駅に海にほひけり九月尽　　弓　人

長谷駅に下車した瞬間の、空気の新鮮さ、市中と異なる匂いを感じ、去りゆく九月への名残惜しさの情をからめました。

三句、いずれも秀逸で感銘いたします。

当季雑詠　　俊　鳥　選・評

（講評）

○　われは今蝉の包囲の内に居り　　豊　嗣

「誇張」は俳句のレトリックのひとつである。上手に使うと迫力が異なる。ここは思い切って明治三十七年の日露戦争調にする。

「敵艦見ゆ！天気晴朗なれど波高し」かの有名な電文である。氏の一句はいまや蝉の包囲網十重二十重、豊嗣提督の旗下退却寸前？すみやかに援軍を要請する、といった状況。今年の夏のすさまじい猛暑である。今年だからこそ「電文」を借用した簡潔な表現がすこぶる面白く、景色にふさわしいのである。

○　炎帝と四つに組んでみせようぞ　　しろう

ある意味で、前掲豊嗣作品に通じる部分がある。それは「気合」。しろう句も気合一発、酷暑に打克とうとしている心理が有体である。

炎帝は夏を司る古代中国の神の名。毎年、数十万の精鋭を引き連れて攻めてくる。「ぞ」は終助詞で、体言、活用語の語尾について「断定」をさらに強める。さすがの炎帝もしろう将軍の前ではすごすごと退散するしかなかろう。

○　思い出はすべて白色終戦忌　　清　龍

人類にとって戦争は宿命であろうか。人類の歴史は戦争の歴史であることもみとめざるを得ない事実である。

とりわけ今次大戦は日本人男子四人に一人が出征、二世帯に一人以上の兵士を送り出したという。そして、約三百万人の国民が命を落し二千万人以上の人々が悲嘆の涙に暮れた。

戦争に思い出などはない。あるとすれば白色の思い出。痛恨の反戦歌。

汗ふいてじつと我慢の一夜酒　　冬　草

白米を焚いて充分に搗きつぶし、米麹とまぜて密封、その後一晩置く。一夜にして完成することからせっかちな左党用かと思われるが、江戸時代から消暑用かご婦人用「じっと我慢」は冬草さんなのか？

甘き香の天女の誘ひ蟻地獄　　弓　人

寺の縁の下など雨風を避けられるさらさらした砂地に、すり鉢をこさえて中心の底に潜む。付近を通る蟻がうっかりしてすり鉢の底へすべり落ちるとは考えにくい。氏のいう「甘き香」とは、ギリシア神話のサイレンの歌かフェロモンか。

絶筆のショパンの曲や秋の夜　　雅　子

秋の夜長に聴くくとすればショパンほどふさわしい曲はあるまい。だが、絶筆の判断は難しい。彼は一八四九年（嘉永二）年に三十九歳で亡くなったが有名な「小犬のワルツ」はその寸前に作曲されたとのこと。絶筆かどうか？

稲刈りを初体験の飯の味　　慶　子

仏蘭西革命のころ「パンがなければお菓子を食べればいいのに」と幼い疑問をなげかけたお姫様。体験がないと「お米の木ってどんな木？」といわれかねない。貴重な体験をさせることがおいしく御飯を食べさせるコツ。

蟷螂の成りすましたる蔓の先　　和　代

昆虫離れした逆三角形の頭。全く鎌に似た脚。蝶が来るとその鎌をひと薙ぎして獲物とする。また交尾を終えるとメスはオスを食べてしまうのだと。彼らはあまり良い風評ではない。ここでは枯れ蔓に成りすまして、即身成仏を待つ。

背に猫を背負いて仰ぐ炎天下　　靖

酷暑であれば誰しも炎天をふり仰ぎ、ひと雨こないかとため息のひとつもつこうというもの。　本句、一瞬ほんものの猫を背負っているのかとギョッとするところが面白い作りである。

汗光る黙祷八時十五分　　マサ

日本本土上陸作戦の犠牲を減らすため、あらかじめ原爆を投下して数十万人もの無辜の市民を殲滅しても可とする恐ろしい論理。黙祷の間も怒りがこみ上げ額の汗がふき出す。六十五年前の八月六日午前八時十五分広島。

神国は誇りは死となし終戦日　　晶子

海行かば水浸く屍山行かば草生す屍（万葉集）を巧みに利用した大政翼賛会。

風鈴の音色も透けて垣根刈り　　黄雀

風鈴の音の澄んでくるのと日差しが澄み始めるのとは軌どうを一にするのか。

吾の血に酔ひて秋蚊の不貞寝かな　　西風

秋の蚊の不貞寝は吾の血の酒精のせいか、代々の血のせいか。

迷いとんぼ命はかなし飛んで行け　　信貴

季節はずれの塩辛トンボ。飢え死にしない間にせいぜい遊んでおくこと。

長年の会を閉じる日蝉時雨　　満紀子

何の会かよく続いた？降るような蝉時雨のなかでついに解散のときがきた。

蚋多し異常気象は森にまで　　河童

本来空気清澄なる高原の森にまでブトが。世界的な温暖化のせいか。

待ちかねて少しお出まし龍田姫　　善啓

秋を司る龍田姫。そろそろお出ましなのか。まだ薄化粧である。

幽霊も暑さにばてて立て籠もり　　藤則

幽霊も昼間の暑さに弱いとは知らなかったデス。だから夜勤専門で・・。

湯の宿や過ぎ往く女の洗ひ髪　　智昭

「洗い髪」は夏の季語。その艶なる風情は女性だけのもの。振り向く智さん。

（後記）記録破りの酷暑。「滅却心頭火自涼」と作句に努力されたみなさんの、気迫あふれる作品群に圧倒されました。炎暑に厳しい夏は豊作の秋の予兆。

今秋の御健吟をお祈りいたします。